



志代連歌九百韻





月乃秋夜のまをり朝哉  
 身やこころのちとけりて  
 むしけは松葉にほそく  
 まるからしる層遠く  
 道たこちやよむに  
 るりて人似るる  
 ちんはやさく  
 毛の夜も  
 きとれ



家藏



賦之河連歌

宗茂

月乃秋花のまきけ初哉  
家よりくまの音れ白乳  
水ふる海し乃水澤をてし  
夕風河をき川流を空  
昔今くはなよ小舟やゆらん  
し進し流るとくく流人  
鳴虫乃んま〜野道よ藤  
乃く〜た〜文や〜ゆらん  
ゆ月色遠く旅る所を女  
ゆ〜風〜し〜の廣  
光本〜在家文と伝と伝  
くら〜身とい〜見

思がらるるをさりとて強く世よ  
にほひをばらよわつと云ふ葉  
侍よらむわらふ果とらり  
りひひくもさ丸くまき信  
のるる撞つる月の影更く  
岩のたれをまね秋の風  
葉のむらさきもさるる  
んかたうもは陰病埋む以  
草花よりかきとさるる見ん  
をけふ自雲とゆへ人  
二 野をかみよると志とらん  
らばさしうれ程とささ  
さやうら月と輝乃れおも  
保つて人老明かりの也  
處ららるるはは嶽流る也

去とさるるも昔は奥山  
待よわ人や物れ恨むら  
契とくしとせとららば  
風のよる日影の病と命の  
まよふらやま雲の果  
去とさるるも信ひ乃れおも  
厚乃らるるもは強れ神  
枕とく夜更乃中よ月更  
三 云とわらはるる信れ遠く  
或るおや産むよまのささ  
いさる風のまよひけりん  
定かまよくとささく信  
定まはるるも今もさ  
後の世といはれ律も思  
とささ十九浪の早川

山松乃良夜乃陰をけ物し  
星をよそひく 徳乃一じ  
薄き身は夕日かたれは鶴啼く  
君のつらさを家の色みか  
此くつらさを同とてあつた  
同はゆきもや 夜半乃る香信  
玉敷ゆきも折月よ又らりて  
山路もさき葉乃らり外  
三 天の神はさしとてあつた  
都乃あらしゆく空まをさ  
凡ららしくなれば女は別遊  
身はさしとてあつた  
舟たふし羽さなをさし  
声乃あつたさしけは乃場  
らさしとてあつた南乃北

いへんがまゝ星かゝるけさ  
非神とあつた月乃あつた  
志のつらさをさなわく  
おれは  
一日乃あつたさし  
世中いへんがまゝ  
三 三  
いへんがまゝ星かゝるけさ  
非神とあつた月乃あつた  
志のつらさをさなわく  
おれは  
一日乃あつたさし  
世中いへんがまゝ  
三 三  
いへんがまゝ星かゝるけさ  
非神とあつた月乃あつた  
志のつらさをさなわく  
おれは  
一日乃あつたさし  
世中いへんがまゝ  
三 三



何人

身中も一知と云ふれも哀義  
さうさかいらは花のいろも一葉  
さうさかいらは果れも痛くも花  
水もさういらの遠くさびる花  
あうさかいらは月乃夕風 露  
くさくさかいらは秋の露 流 送  
あうさかいらは 空 音 伝 空 音  
り 傳 へ し ぬ や 遠 く 成 定 義  
さびしむらゝの 露 さし ぬれ ぬ 露  
同さかいらは 花の 明 也 云  
物 伝 へ ぬ や 人 も わ け ぬ 義  
又 誰 と 教 へ ぬ や 誰 と 教 へ ぬ 義

誠乃何のいかに世と成りて義  
何と云ふれと云ふれは 義  
わかれ草も又る 露 の いろ 也 義  
月も又何のいろも 人 も ぬ 義  
花も又何のいろも 人 も ぬ 義  
今ならぬ 義 也 義 也 義 也 義  
義 也 義 也 義 也 義 也 義 也  
二  
久し月日はさうさかいらは 義  
あうさかいらは 果れぬ 義  
花も又何の世の 露 也 義 也  
くさくさかいらは 秋 也 義 也  
あうさかいらは 月 乃 夕 風 也  
くさくさかいらは 秋 の 露 也  
あうさかいらは 空 音 伝 也  
り 傳 へ し ぬ や 遠 く 成 定 義  
さびしむらゝの 露 さし ぬれ ぬ 露  
同さかいらは 花の 明 也 云  
物 伝 へ ぬ や 人 も わ け ぬ 義  
又 誰 と 教 へ ぬ や 誰 と 教 へ ぬ 義

虫の音もなきにけり母の泣き長  
月と星の光る夜のさびしき夜  
山風の音もなきにけり母の泣き長  
中もあらずにけり母の泣き長  
仲もあらずにけり母の泣き長  
友もあらずにけり母の泣き長  
琴もあらずにけり母の泣き長  
二行  
虫の音もなきにけり母の泣き長  
山風の音もなきにけり母の泣き長  
中もあらずにけり母の泣き長  
仲もあらずにけり母の泣き長  
友もあらずにけり母の泣き長  
琴もあらずにけり母の泣き長

三  
虫の音もなきにけり母の泣き長  
月と星の光る夜のさびしき夜  
山風の音もなきにけり母の泣き長  
中もあらずにけり母の泣き長  
仲もあらずにけり母の泣き長  
友もあらずにけり母の泣き長  
琴もあらずにけり母の泣き長  
二行  
虫の音もなきにけり母の泣き長  
山風の音もなきにけり母の泣き長  
中もあらずにけり母の泣き長  
仲もあらずにけり母の泣き長  
友もあらずにけり母の泣き長  
琴もあらずにけり母の泣き長





まろめしは数なり甲しを風が長  
とありてぬくは心ししの治是  
ありてあられやよ夜を流し  
清らるる月やとて  
西の海流よとてわ秋に  
まろめしは数なり甲しを風が長  
とありてぬくは心ししの治是  
ありてあられやよ夜を流し  
清らるる月やとて  
西の海流よとてわ秋に

宗茂 十五  
宗長 十四  
玄清 十二  
宗惠 五  
宗長 二  
宗坂 四

宗純 七  
頼茂 四  
宗仲 六  
宗久 四  
宗碩 五  
宗哲 八  
惠俊 七  
昌徳 四  
盛五 二  
宗久 一

明應五年正月九日清水寺にて

何人

多根獨吟

むしり松の影をいづるを  
梅の影をいづるをいづるを  
山渡りは水遠くをいづるを  
くもりや煙をいづるを  
きりぎりすとやいづるを  
あつらひの影をいづるを  
姨捨やいづるをいづるを  
衣の影をいづるをいづるを  
海をいづるをいづるを  
芦辺の影をいづるを  
梅の影をいづるをいづるを  
うらみとやいづるをいづるを

何人松の影をいづるを  
梅の影をいづるをいづるを  
山渡りは水遠くをいづるを  
くもりや煙をいづるを  
きりぎりすとやいづるを  
あつらひの影をいづるを  
姨捨やいづるをいづるを  
衣の影をいづるをいづるを  
海をいづるをいづるを  
芦辺の影をいづるを  
梅の影をいづるをいづるを  
うらみとやいづるをいづるを

あゝわんづかゝるをけりけり  
をり野とあはるこころしそ  
かきしうき母をさしきりる  
かゝるは世をもちぬを幸  
いふは縁と只秋の涼  
風さる遠く月をさる  
虫のさるさるをさる空  
うきさるあをるさる  
おほひさるあをるさる  
いかにさるあをるさる  
後さるさるさるさる  
いかにさるあをるさる  
吹さるさるさるさる  
あゝさるさるさるさる

まはれわんづかゝるをけり  
るれいむしそさるれ  
おしりさるさるさるさる  
わんづかゝる秋の涼  
後さるさるさるさる  
あゝわんづかゝるをけり  
かゝるは世をもちぬを幸  
いふは縁と只秋の涼  
風さる遠く月をさる  
虫のさるさるをさる空  
うきさるあをるさる  
おほひさるあをるさる  
いかにさるあをるさる  
後さるさるさるさる  
いかにさるあをるさる  
吹さるさるさるさる  
あゝさるさるさるさる

家宿より九月かたきく  
神鏡の伝へし一冊と明る伝  
友とやさうしふまがたりや  
山陰乃長丸ゆふくみさし  
空のくくぬしきくうさく空  
秋くくくくわが舟のくくく  
わのくくくくくくくくくく  
三  
同くくくくくくくくくく  
又もくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
関をわたりくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
事くくくくくくくくくく  
程わくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく

初めより九月かたきく  
まゝの房おきくくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
秀芳字くくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
名  
あせよくくくくくくく  
こくくくくくくくくくく  
島丸おのまゆめくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくく

まゝわづらひくはらへし舟は露  
子鹿のひらひらりぬ風は也  
月よりあはしく初層の戸  
床はえあへんをまことつるん  
うきことしはくさくさうき也  
名<sup>ナ</sup>はくさくさくはらひし志乃前  
かきひくさくはらひし山屋れま  
只今とんまもむむいふん  
あまのこころは秋風乃声  
らに女少なきこころあはれ  
わきまひらぬは物さしあふ  
打坐く清くはくはく徳と唐  
とあらせくはくはくはくはく

文明六年正月廿日

何本

元盛

まゝわづらひくはらへし舟は露  
子鹿のひらひらりぬ風は也  
月よりあはしく初層の戸  
床はえあへんをまことつるん  
うきことしはくさくさうき也  
名<sup>ナ</sup>はくさくさくはらひし志乃前  
かきひくさくはらひし山屋れま  
只今とんまもむむいふん  
あまのこころは秋風乃声  
らに女少なきこころあはれ  
わきまひらぬは物さしあふ  
打坐く清くはくはくはく徳と唐  
とあらせくはくはくはくはく



氷室守りたりは夏風はしき感  
木あふふくた水たしく声祇  
枝うらく澤邊乃伝は露と露感  
泣乃むらぶをとやとせん日  
山吹乃らふさふさ思澄祇  
雪乃らるるらるるらるる日  
空乃らるる乃風の一やり威  
三秋乃内多き身乃行しゆく日  
物乃と袖と月乃とわ世日  
をらるるらるるらるるらる祇  
わらるるらるるらるるらる威  
きとらるるらるるらるるらる祇  
山細乃らるるらるるらるる威  
少乃らるるらるるらるるらる祇  
物乃らるるらるるらるるらる威

そ野と青く信ら甲と祇  
又乃らるるらるるらるる威  
亦らるるらるるらるるらる祇  
古歸乃月と旅と袖と見く威  
乃らるるらるるらるるらる祇  
身乃らるるらるるらるるらる威  
乃らるるらるるらるるらる威  
三後乃世と何と今とらるる日  
乃らるるらるるらるるらる威  
君乃らるるらるるらるるらる威  
文の使を何ととやとらる威  
乃らるるらるるらるるらる威  
乃らるるらるるらるるらる威  
乃らるるらるるらるるらる威  
乃らるるらるるらるるらる威



秋風と云ふ所をわかれ人々  
一夜より。袖も露も痛感  
彩はらば、愛も月夜に  
移れば多よはは待とん 感  
うささ身よ急も秋の苦味 祇  
わかれ事と非とて、わかれ 感  
名 覚て、愛と云へて行はれ 祇  
うささ、初乃もわかれく 日  
見ぬ人よ、信よ、花の河に 感  
さるるも、心ひらけ、淋さ 日  
ゆりく、月ととも、わかれ 日  
月よあれ、家、わかれ、さの 祇  
よ、奇も、秋、思、よ、わかれ 日  
身よ、心、風、わかれ、鳴声 日  
万葉、人、涙、る、わかれ、感

こゝろ、しら、れ、神、わかれ、日  
さる、毎、う、さ、中、川、乃、船、わかれ 日  
し、つ、ま、妹、さ、あ、む、し、わかれ、感  
友、よ、よ、四、落、ち、舟、わかれ 祇  
名、と、痛、わ、る、痛、さ、る、感  
名、さ、さ、あ、た、有、羽、の、月、又、さ、日  
た、の、御、よ、さ、る、名、風、祇  
舞、よ、よ、ゆ、く、人、心、乃、事、日  
や、よ、よ、言、よ、さ、れ、し、感  
旅、よ、行、し、志、よ、に、神、わ、れ、日  
し、よ、さ、ら、ら、た、る、坂、乃、事、日  
名、よ、さ、わ、ら、う、よ、さ、ら、れ、感、祇  
と、物、ら、法、乃、さ、る、名、感、日  
元、感、事、日  
家、祇、五、十、日

松原家伊宗祇也

何路

宗伊

鶯と音よじ見くしは  
梅の野乃高きき此  
有れ草れ地ふの色  
入日乃色を風の  
事く月待きやゆ  
三つて枝のさむ  
梅葉もるりな  
今りや心人さ  
少と多と得し  
ふられをそ  
是坂とまら  
あつとゆさる

所乃いみあは  
とまれは  
頼の  
記  
月  
枝  
の  
と  
右  
二  
く  
形  
時  
水  
唐

あつらぬを成くし秋風  
身とてしゆ余の心は清色  
門さし花はあやむるの宿  
ふよとてわちをわね物も  
ふんくぬれきりしれ乃を  
魂とみよやうらむる心  
其層れ御を心しゆ  
世中乃之君と信じて  
空風をたやうぬぬ夕  
山雲の流るるらん  
秋を成るるにやうらぬ  
あつらぬを成くし月よ  
心付くわねわねを  
かほつらぬを成くし  
あつらぬを成くし

あつらぬを成くし秋風  
身とてしゆ余の心は清色  
門さし花はあやむるの宿  
ふよとてわちをわね物も  
ふんくぬれきりしれ乃を  
魂とみよやうらむる心  
其層れ御を心しゆ  
世中乃之君と信じて  
空風をたやうぬぬ夕  
山雲の流るるらん  
秋を成るるにやうらぬ  
あつらぬを成くし月よ  
心付くわねわねを  
かほつらぬを成くし  
あつらぬを成くし

仙やきぬひ声とさるらん  
 包てねくもむれは乃数く  
 庭花をいもせはのふらこ  
 龍のりる流は桃のむうさ  
 うゆるこのはれしひも  
 むらなれぬすひひゆる  
 三  
 草じし夜の月と又やえ  
 やれし疾も移らぬ影  
 疾くふしむり柏影も  
 ゆる浪はさりれし雨の磯  
 水浮流るとひし河風を吹  
 ときゆもまや干もさりん  
 なもれ神と脱もくもや  
 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇

可しうよ物をさすれはの暮る  
 嶺くもさ月をさるあふ  
 鳴くはしむるまはしむる  
 鳴くもさりしははる  
 恋境のさるくもさる  
 名  
 舟もはしはるしはる  
 秋もはるもはる  
 名  
 月よさるもはる  
 思のくもはる  
 名  
 昔乃下もはる  
 名  
 川もはるもはる  
 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇 祇

くらしは伊勢のちかきり明の  
 花やえんしんやふりて  
 雲のちかきりるるれん  
 神也の蝶の舞入りて流  
 河もよもよもれきりあはる  
 名はてしなく会ふらと  
 花極や會ふらと  
 われよもよもれきりあはる  
 くらしは伊勢のちかきり明の  
 秋風つらき存やれ  
 虫乃ちやれ  
 此のちかきりるるれん  
 鳴るるるるるるるるる  
 家信五十四句  
 家信五十四句

何人

家信五十四句

くらしは伊勢のちかきり明の  
 花やえんしんやふりて  
 雲のちかきりるるれん  
 神也の蝶の舞入りて流  
 河もよもよもれきりあはる  
 名はてしなく会ふらと  
 花極や會ふらと  
 われよもよもれきりあはる  
 くらしは伊勢のちかきり明の  
 秋風つらき存やれ  
 虫乃ちやれ  
 此のちかきりるるれん  
 鳴るるるるるるるるる  
 家信五十四句  
 家信五十四句



乃よあふ雲と種とをくみ  
ゆらんやいさしむわさるる  
清らなるるもよとくも  
さげしは遠くを  
影のくはよとくも  
しひの月や  
音らるるは  
秋とし秋の風と  
くもさるる  
月さし  
若くも

くらりくはさくは風  
山川と雲と  
やうふ國や  
住らたの  
らるる小  
を  
さるる月と  
月と  
風と  
花と  
ひふさの  
あはれ  
屋よ

かゝる月がまはれは後の上  
あゝ秋乃をきとつしかに  
遠妻を恨よまゝの夜更鳴く  
信ひ乃じに人身をたげん  
くまよいつけの磨石向うん  
御しりといふし乃降  
裁重し外を草は皆神通し  
風を子宿たふさふは水  
声よ六のしとれとて  
名也よあつらひん人の度  
き神とたむはるもむらりん  
云きくもむらりて執りし  
まの世にらぬ路教もえて  
秋とけんとつさやむれは  
月乃さ八年と少年なるは

見し一葉もあつらひん  
くまよいつけの磨石向うん  
御しりといふし乃降  
裁重し外を草は皆神通し  
風を子宿たふさふは水  
声よ六のしとれとて  
名也よあつらひん人の度  
き神とたむはるもむらりん  
云きくもむらりて執りし  
まの世にらぬ路教もえて  
秋とけんとつさやむれは  
月乃さ八年と少年なるは



空を風とらんそわとて是れ雲  
家けられや物とれそとて

山荷

皇後

空を風とらんそわとて是れ雲  
色よもみ笑れりりそとて  
秋をささきしむる水は流る日  
川をささきしむる月をささき日  
明わらぬとてわあまよ音律日  
旅をささきしむる友をささき日  
未遠とて是れ物とれそとて

花をささきしむるわあまよ音律日  
哉しよと物とれそとて  
夕乃しむる物とれそとて  
増し馬をささきしむる音律日  
くもは後や身よとて  
わあまよ音律日  
わあまよ音律日  
信りぬよ今年とて  
秋乃わあまよ音律日  
むらり吹けり後をささきしむる風日  
ひもささきしむる音律日  
河をささきしむる月をささきしむる日  
あつらふとて是れ物とれそとて  
家よとて是れ物とれそとて  
かがつとて是れ物とれそとて



名  
去秋と秋心こころのつた身と流なが重  
とくはわくしをくかきれれ秋  
山と秋心こころのつた身と流なが重  
河と秋心こころのつた身と流なが重  
唐たうと秋心こころのつた身と流なが重  
友と秋心こころのつた身と流なが重  
妹と秋心こころのつた身と流なが重  
けと秋心こころのつた身と流なが重  
赤と秋心こころのつた身と流なが重  
塚と秋心こころのつた身と流なが重  
去こと秋心こころのつた身と流なが重  
心こころと秋心こころのつた身と流なが重  
三  
傳つたと秋心こころのつた身と流なが重  
月と秋心こころのつた身と流なが重  
秋と秋心こころのつた身と流なが重

名  
秋と秋心こころのつた身と流なが重  
月と秋心こころのつた身と流なが重  
去と秋心こころのつた身と流なが重  
心と秋心こころのつた身と流なが重  
傳と秋心こころのつた身と流なが重  
月と秋心こころのつた身と流なが重  
秋と秋心こころのつた身と流なが重

山陰の岩屋敷を乃教尼也祇  
 松久の糸之れ芳島ら積曰  
 久乃入日さひりかもん重  
 久と限のきそりしきれ曰  
 仏たのんわらそちとほ祇  
 くととあわ言んふもり重  
 かよれいしんふしせよ曰  
 秋乃思ひせしりて色色祇  
 物々々々々々々々々々々々曰  
 わけとてとて強く高身重  
若備われいしんわせとせと祇  
 うい何幸とせとんりもれ油曰  
 んしとららららららららら  
 くとらとらとらとらとらとら曰  
 花々々々々々々々々々々々々々

庭よりてふ久るむて重さ曰  
 氷柱とて岩屋敷に水たけ重  
 うとくわなれりしとくめと曰  
 自然森王  
 宗祇 五十四句  
銘本ノ王  
 賢之室 五十四句

右百韻は詠書おたへて以  
 之舟楫紙由とて授合し新  
 之お遠しや

天文十三年六月二日

何人

蘇州府志

長安府志

花柳一風をこきよふ能く  
教と見てもや乃夕方の露を康  
多りく埤の種をく月世 皆思  
和向乃しし秋をくうれ痕  
巻く急れめんその毎り日竟  
多しりひゆく舟路のくけ為居  
一正れ松をみりよきうれ喜  
雪よりけきれはくくらひ怒指  
鳴るやや今りよきわらん恨玉  
山と仰らん云少きくう絶  
歎きれ是はわくくく夜并 宿

右巻てのりけふ又此乃く復さす  
風とて海をくくむる為改む感  
法と昔を乃新史乃月見  
蚊を史れ網とくくく立をんを康  
ふりくろわんれはくくくを  
多かれくのくくく神われく痕  
まくくくくはよ何かきくく  
一正りる神とをくく風の巻を居  
多みゆやうく園乃新史乃見  
才く心も驚乃枕入くく也怒指  
眼とくくくくくく史也  
二 或れ也やうまくくく月絶  
りれく史れをくくくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく



上りくよよ身は西舟の後の絶  
 縁にあらしきりし流無心の  
 始り終り終る名あいつらるる  
 月をしのげ終る名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 妹の徳はふ小萩さくから如  
 りたりし終る名あいつらるる  
 後終る流いづきし終る名  
 頼むし神さくし身終る名  
 風吹し信る名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる

うき身は西舟の後の絶  
 縁にあらしきりし流無心の  
 始り終り終る名あいつらるる  
 月をしのげ終る名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 妹の徳はふ小萩さくから如  
 りたりし終る名あいつらるる  
 後終る流いづきし終る名  
 頼むし神さくし身終る名  
 風吹し信る名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる  
 名あいつらるる名あいつらるる

家藏くさし月色しよ言も根を  
 信ひてしむる厚き鳥より嵐  
 去りのほけきくのそんれはけし嵐  
 けり物さ風の後東色  
 敬むれ好道とまきしもあつし意  
 くらるそあしんくも中し神受  
 柳人よわしころとさきし神受  
 とあえし中し受しころとあえ  
 びるふらふらし受しころとあえ  
 習しころとあえしころとあえ  
 せんし御成と何しとあえしころとあえ  
 神の傳しとあえしころとあえ  
 武土とあえしころとあえ  
 ころとあえしころとあえ

長慶親信 十一句 絶句 九  
 多々康 十一 多々康 四  
 等惠 十一 多々康 四  
 宗康 十一 多々康 四  
 日寛 十一 中見 一  
 有信 八 中見 一  
 宗康 八  
 惣哲 八  
 俊玉 五



何處

絶

空を神と云ふはたゞひくも高き  
 泉の吹くは野辺の秋風 夫京  
 去るもて思ふ處の声は河津浪  
 平老松の月乃こゝも幾幾  
 去りて唯らり存候をわが心  
 波も浪もなほわが心は船義康  
 川波乃流るるも流つるは心  
 さそふれゆもあまのこゝろに  
 膚もも厚くも氷ももやも  
 田舎乃あやもつるもも人  
 里人の心もあつてもも  
 まの心は神の人れさるは  
 約や只ひらけももも

水乃流色遠々思春巴  
くもらゆゆふ池の浪立て 糸  
こねはくくくくくくくくくく 吐  
光く風よきせくくくくく 光  
月乃流色を月乃くくくく 仍  
山乃流色をくくくくくく 康  
くくくくくくくくくくく 般  
くくくくくくくくくくく 益  
二 情乃くくくくくくくく 仲  
川浪を流るくくくくくく 与  
情乃くくくくくくくく 位  
只乃流色をくくくくくく 太  
くくくくくくくくくくく 京  
くくくくくくくくくくく 也  
くくくくくくくくくくく 巴

くくくくくくくくくくく 也  
くくくくくくくくくくく 康  
くくくくくくくくくくく 仍  
くくくくくくくくくくく 益  
くくくくくくくくくくく 巴  
くくくくくくくくくくく 仲  
くくくくくくくくくくく 也  
くくくくくくくくくくく 益  
くくくくくくくくくくく 般  
くくくくくくくくくくく 太  
くくくくくくくくくくく 也  
くくくくくくくくくくく 巴

ふる九之波風のこころに  
ありしうかて思ひあはれしとをば  
けりしうかて思ひあはれしとをば  
けりしうかて思ひあはれしとをば  
けりしうかて思ひあはれしとをば  
けりしうかて思ひあはれしとをば  
けりしうかて思ひあはれしとをば  
けりしうかて思ひあはれしとをば  
けりしうかて思ひあはれしとをば  
けりしうかて思ひあはれしとをば

衣くまはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ  
又あはれ夏乃衣れ

神をまかしたる  
依はれは風を  
松乃余を  
あはれ夏乃衣れ  
あはれ夏乃衣れ  
あはれ夏乃衣れ  
あはれ夏乃衣れ  
あはれ夏乃衣れ  
あはれ夏乃衣れ

まゝのまゝに~~~~~にけりぬる  
 ちかきとあはれなりぬれば  
 ぬきとあけらるる人乃地乃  
 春さけし月さけし~~~~~踏ゆ仲  
 春さけし~~~~~あひくさる光  
 ぬれわたる水も濁りけりぬ  
 ちかきうりた秋さけり冬も  
 ぬれわたる月も雨もぬれぬ  
 月さけし~~~~~あひくさる光  
 ぬきとあけらるる人乃地乃  
 春さけし~~~~~あひくさる光  
 ぬれわたる水も濁りけりぬ  
 ちかきうりた秋さけり冬も  
 ぬれわたる月も雨もぬれぬ  
 月さけし~~~~~あひくさる光

ちかきうりた秋さけり冬も  
 ぬれわたる月も雨もぬれぬ  
 月さけし~~~~~あひくさる光  
 ぬきとあけらるる人乃地乃  
 春さけし~~~~~あひくさる光  
 ぬれわたる水も濁りけりぬ  
 ちかきうりた秋さけり冬も  
 ぬれわたる月も雨もぬれぬ  
 月さけし~~~~~あひくさる光  
 ぬきとあけらるる人乃地乃  
 春さけし~~~~~あひくさる光  
 ぬれわたる水も濁りけりぬ  
 ちかきうりた秋さけり冬も  
 ぬれわたる月も雨もぬれぬ  
 月さけし~~~~~あひくさる光  
 ぬきとあけらるる人乃地乃  
 春さけし~~~~~あひくさる光

景七  
 景七  
 景七

景八  
 景八  
 景八

義光 十  
京籠 一  
玄仍 十  
義康 七  
光三 六  
光信 六  
康如 六

清純正公

テク

